

#7119と#8000の小児救急医療相談件数について

2019年度は、大阪府医療対策課により、#8000・#7119・大阪府救急医療情報センターの意見交換会が開催された。（不定期開催）これらの取組みを通じて、可能な範囲で#7119からデータを開示していただいた。

#7119に関するデータは平成30年度のため、ここでは#8000も平成30年度の集計を用いた。平成30年度年報 <https://www.city.osaka.lg.jp/shobo/cmsfiles/contents/0000052/52526/H30nennpou.pdf> では、#7119は医療機関案内と救急医療相談に分かれ、それぞれ集計報告の方法も若干異なっている。医療機関案内は、小児科系（小児科・小児外科・新生児科）案内件数として50,758件（全体215,363件中23.6%）で、救急医療相談は15歳未満件数が56,655件（全体117,685件中48.1%）であり、合わせると#8000のおよそ2倍の対応が行われている。今回#7119の小児の時間帯別相談件数を問合わせた結果、電話相談において#7119と#8000の件数はほぼ同じであるが、夜間の#8000開設時間帯の#8000相談件数は#7119の2～3.5倍で、#7119は19時にピークがあり、20時以後は少なくなっていた（図）。

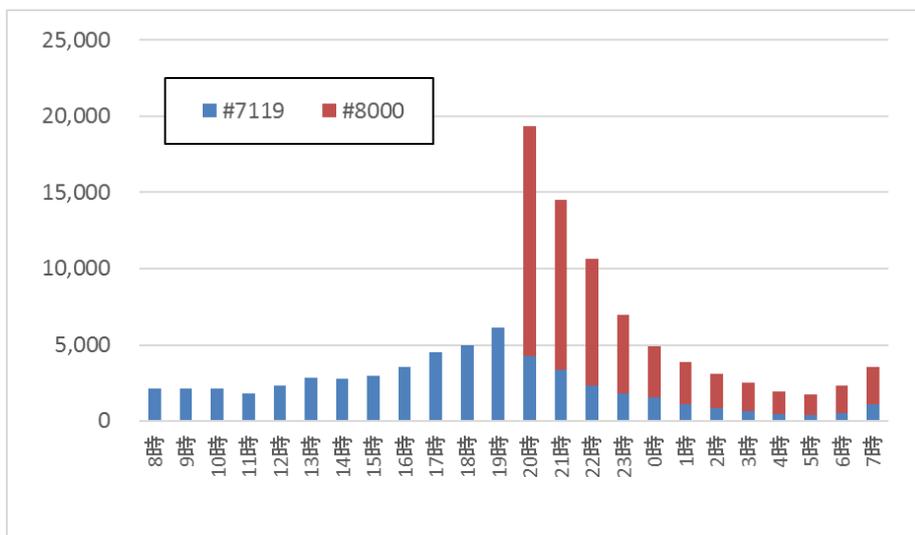


図. #7119と#8000における15歳未満の時間帯別相談件数(平成30年1月～12月)

#7119は総務省の管轄で、大阪では大阪市消防局救急部が運営している。救急車を呼ぶ判断に至った場合、即救急車発動に直結できるシステムである。医療機関案内としては外科系が7万件以上、3割を占め、救急医療相談では小児の相談が48.1%を占める。受診の判断はプロトコルに従うトリアージの形で行われ、救急医療関係者のアンダートリアージを避けたい考え方が反映され、迷う場合は受診を勧める傾向がある。電話相談では、例えば保護者の質問で「今受診が必要か？」の裏に「今受診しにくい状況にあるので、何をすればいいか？」「ネット情報をわが子にどう当てはめればいいのか？」といった様々な保護者の聞きたいことが存在する。#8000では単に受診の判断を示すだけでなく、聞きたいことに応じ、保護者が子どもを見て考える力を育てることも目指している。夜間は診療体制も限界があり、保護者もできれば家庭で過ごしたい場合が多いため、#8000の目指す方向性と合致して対応が可能である。一方、診療体制の受け入れ状況は、日曜祝日においても夜間より日中の方がスムーズであり、日中の相談では「今のうちに受診を」勧めることが増える と推測される。当面の体制で保護者支援を意識した相談を行うためには、#8000は夜間に特化した方が有用であると考えられる。図4に示したように日中も一定の相談件数はあるが、#7119で対応されているため、府全体の小児の電話相談はバランスを保っているのではないかと評価している。

日中と夜間の対応の違いについては、24時間対応を行っている他県のデータも参考になるため、今後全国情報センターの情報も検討していきたい。小児科クリニックで電話相談を勧める場合には、3歳未満特に0～1歳児では「子どもの見方や考え方、家でどうしたらいいか」等の説明は#8000の方がより詳しいことを、全体に「救急車を呼ぶ」前提の相談は#7119が迅速であることを考慮に入れて、保護者に紹介されることをお願いしたい。

